

YYJKからのお知らせ

「よこはま洋館付き住宅を考える会」では、洋館付き住宅をはじめ貴重な歴史的な建物を未来へ残すための活動を行っています。その活動の一環として、「洋館付き住宅の魅力がわかる本」を発行しております。また、学習会・見学会・展示会等のイベントも順次開催しておりますので、ご興味をお持ちの方はふるってご参加下さい。

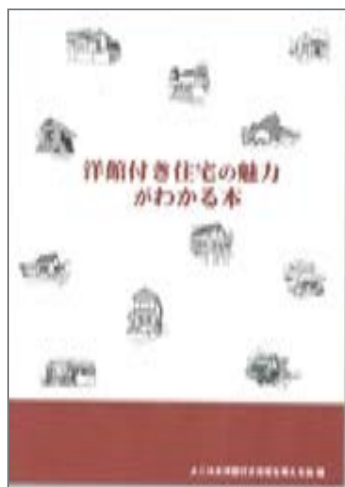
賛助会員を募集しています！！
(年会費 1,000 円)

※ 賛助会員に入会された方には、会報「ハイカラくらしすまい通信」をお送りするほか、各種イベントのお知らせもお送りいたします。

■ 振込先：郵便振替口座 00200-4-68787 よこはま洋館付き住宅を考える会

販売書籍のお知らせ

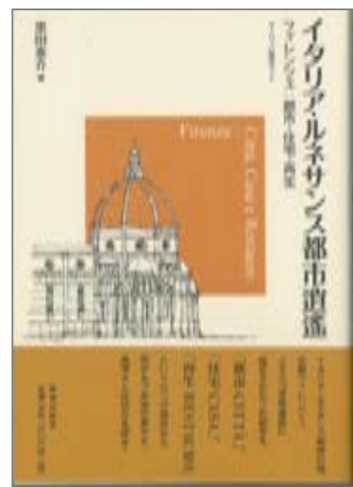
(※ 購入のお申し込みは E メールで yyjk@usc.yokohama まで)



『洋館付き住宅の魅力がわかる本』

洋館付き住宅の魅力や大正・昭和の暮らしの文化をわかりやすいイラストで案内するハンドブック。

価格：800 円 (税込)
送料：100 円
発行者：
よこはま洋館付き住宅を考える会



『イタリア・ルネサンス都市逍遙 (しょうよう)』

ルネサンス発祥の地、世界遺産の古都フィレンツェ。都市・住宅・再生の視点から、街が持つ本当の豊かさを紹介する。当会顧問、関東学院大学教授、黒田泰介氏渾身の書き下ろし。

価格：2,600 円 + 消費税
送料：100 円
発行者：鹿島出版会



『都市の記憶』
横浜の主要歴史的建造物

近代建築、西洋館、社寺、古民家、土木遺産など近代都市横浜を象徴する歴史的建造物や文化財建造物を開設付き写真で紹介。ガイド地図を掲載。

価格：700 円 (税込)
送料：100 円
発行者：
公益社団法人横浜歴史資産調査会

「よこはま洋館付き住宅を考える会」のご案内

洋館付き住宅の魅力を調べ、楽しみ、住み続けるための支援活動を非営利で進めています。

お問い合わせは下記の事務局まで。

会費 (年額) / 正会員 5,000 円・賛助会員 1,000 円 (一口)・法人会員 10,000 円 (一口)

ハイカラくらしすまい通信 第 45 号 編集・発行：よこはま洋館付き住宅を考える会
〒240-0014 横浜市保土ヶ谷区霞台 47-14 (担当：兼弘) / E-Mail: yyjk@usc.yokohama
TEL: 045-335-7164 / FAX: 045-335-7176 / <http://yyjk.jpn.com/>



よこはま洋館付き住宅を考える会会報

ハイカラくらしすまい通信

第 45 号 2019 年 4 月 1 日発行

「フリウリ地震」の町を訪ねて

菊池 邦子

■フリウリ地震

昨年末、40 年振りにヴェネツィア建築大学のクラスメートの家を訪ねました。彼女はヴェネツィアの北東、オーストリアやスロベニアと国境に接する、フリウリ=ヴェネツィア・ジュリア州ウディネ (Udine) 県の自治体ジェモーナ・デル・フリウリの出身。現在は家族で、実家に近い場所でアグリツーリズムのレストランや地産地消の食料品製造販売をしています。大学卒業後は建築家として、地震で倒壊した大聖堂の復元 (restauro) に従事していました。

1976 年 5 月 6 日 21 時 12 分過ぎマグニチュード 6.5 の地震がフリウリを襲いました。私がヴェネツィア建築大学に入学する 3 年前の事で、この地震の震源地が彼女の住むジェモーナ・デル・フリウリ (人口約 1.1 万人) でした。そして、さらに同年 9 月 11 日 (M5.3)、15 日 (M5.6) にも地震が発生し、復旧に向かっていた人や家は大きな打撃を受けました。被害地域は 137 町におよび、被災者 60 万人、死者 989 人、負傷者 2607 人、倒壊建物 18000 棟、被災建物 75000 棟 1)。町の歴史的中心地区 (Centro storico) の建物はほとんど倒壊しました。

■大聖堂の復元

ジェモーナ・デル・フリウリに隣接する町ヴェンゾーネ (人口約 2 千人) には 1300 年代からの大聖堂 (Il duomo di S. Andrea Apostolo) があり、この大聖堂も 2 撃目の地震で倒壊。彼女がこの大聖堂の復元作業の始めから完成まで、10 年以上関わっていたということを知っていたので、早速、案内してもらいました。

復元作業はまず倒壊した聖堂の各部位を収集し、種類別に分類し、更に既存の図面や写真を元に倒壊前にどこに使用されていたか等を検証して、カタログ化する作業を実施。倒壊を免れ



フリウリはイタリア国の北の端

た部分はできるだけそのままの状態を生かす方針で復元が行われたそうです。既存部分の石と新しい石を繋ぐ部分は鉛で接着。その継ぎ目はハッキリと分かるように修復されています。聖堂内部の復元も同様の方針で、壁のフレスコ画は收拾できた部分だけが残り、改修した部分との差は明確です。できるだけ元の姿に復元する・・・という方法もありますが、建物の被った被害やそれをどう修復したかが分かる復元の方法もあるのだなあと、聖堂の空気に触れて思いました。これは石造りの建築だからできるのかもしれませんが。この復元は 30 年近く前ですが、その後、地震の被害にあった歴史的建造物の復元に当たっても、この時の復元方法が継承や参照されているそうです。

■忘れないための施設

また、この地方の地震に対する意識は高く、ヴェンゾーネの町中には昔の宮殿の 1 階に「TIERE MOTUS (ティエール モトウス) ー地震とその人々の歴史ー」という博物館がありまし

(次ページへ)



倒壊した部位を蒐集して分類し、並べる



一撃目の被害状況

た。この大地震に対してフリウリの人々はどのように関わり、様々な機関がどのような働きをして、この大災害から復興を果たしたかがわかる展示でした。これは「Friulanモデル」と呼ばれているようです。そして、震源地のジェモーナ・デル・フリウリの中心地にもちょっと立ち寄れる場所にフリウリ地震の被害やその後の復興状況を伝える展示場が設けられていました。「私達は地震を忘れない！」40年以上の経過を感じない姿に、同じ地震国の私達はどうかどうなるかと、ふと思いました。

今年3月11日で東日本大震災から8年目です。



二撃目で崩壊



既存部分と新設部分を鉛で繋ぐ



右：復元した大聖堂壁に繋ぎ跡が見える



復元後の大聖堂内部

参考文献

1. パンフレット「TIERE MOTUS」
2. 「Venzone La ricostruzione di un centro storico」(Bollettino dell'associazione "Amici di Venzone" - AnnoXXII - XXIII1993-94)

■日本のガラス板製造：1851年（嘉永4年）英国のロンドン万国博覧会では、総ガラス張りのクリスタルパレス（水晶宮）に僅か4ヶ月間に手吹き円筒法で約9万3千㎡が納入された程、ヨーロッパでの板硝子製造は早くから盛んであった。しかし、日本では明治に入り増大する硝子製品の需要に対し官や民間が硝子製作所を設立したが、特に建築用の板硝子製造は著しく難航し、明治末までヨーロッパからの輸入に依存していた。

■官営品川工場：明治3年京都府官営硝子工場が創設されるも、硝子雑器のみの製造であった。明治6年興業社が品川に工場を建て、英国より板硝子製造機械の購入と技術者を招聘したが、板硝子の製品化はならず、経営困難となった。折しも、工部省が硝子製造の計画を立て、明治9年興業社を買上げて官営品川硝子製造所となった。しかし、硝子雑器作成のみで板硝子製造にはならず明治16年閉鎖され、明治18年品川硝子会社へ売却され、引き続き硝子雑器やビン類を製造したが、明治25年閉鎖にされた。その旧品川硝子製作所の建物は現在明治村に移築保存されている。

■生活硝子雑器の生産：硝子雑器として、明治期に普及した灯油ランプの火屋（ほや）や油壺、そして食器、各種飲料品の瓶、各種薬品瓶等の雑器類が量産された。明治から太平洋戦争以前の古い瓶には歪みや気泡が入り、合わせ目のシーム線、陽刻状の商標や文字付、多色付きの瓶が多い。この間、政府の硝子製造の奨励策に押されて、数社の硝子工場が設立するも、いずれも板硝子の生産には至らなかった。当時、板硝子はまだ手吹き円筒法で、熱しながら何度も息を吹きこみ重い吹き竿を操り膨らますが、欧米人に比べて小柄な日本人の体力や肺活量により所定の規格の大きなプロパンボンベ状の円筒（1.5m長×0.3m径）作成が非常に困難で板硝子製品までにはならなかったといわれる。その円筒を輪切りにして展開し、板状に成型する製法であった。

写真1. 旧品川硝子製造所（明治村 WEBSITE より）/ 写真2～5 各種灯油ランプ / 写真6. 浮き玉（昭和初期より直径36cm北一硝子製 大きいため吹き込み穴跡が3か所ありロープ網に入れて漁網に繋ぐ）
写真7. 瓶類（牛乳瓶と樽油瓶、歪み、陽刻やシーム付き） ※2～7筆者撮影



写真1



写真2



写真3



写真4

参考図書：
旭硝子及び日本板硝子社史（渋沢社史データベースより）
ガラスの技術史 黒川高明著
アグネ技術センター2005年刊
日本近代建築技術史 村松貞次郎著 彰国社昭和54年刊、他



写真5

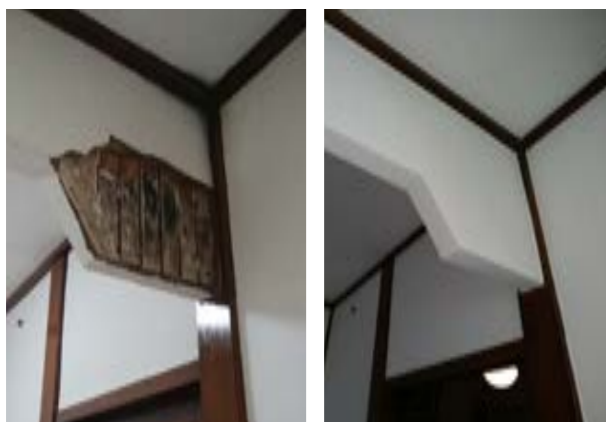


写真6



写真7

保土ヶ谷区にある洋館付き住宅で、シロアリの被害にあった住宅を修繕しました。現調した時は、玄関廻りの土台や腰壁の一部だけ被害を受けていると思われましたが、最終的には、玄関廻りの土台と柱の下から50センチ位はほとんどダメになっていました。一部雨漏りもしていましたが、小屋梁にまで被害を受けていた



下がり壁修繕前

下がり壁修繕後



壁補強工事

壁補強工事完了後

のには、驚かされました。湿気や雨漏りした所、木の柔らかい所、人間の目の届かない所がシロアリには良い条件のようです。構造体の部分で被害にあった所を取り除いている時には、建物が傾いたり歪んだりしていないか、特に漆喰の壁のある部分はなおさら注意して慎重に解体しました。柱、土台は新材に変え、壁の部分の補強方法については兼弘さんにアドバイスをもらいました。今回は、小屋梁にも被害があったので、屋根を壊さずに梁の交換する方法はずいぶん悩みました。屋根材が瓦葺きなので軽いこと、母屋と屋根垂木には被害が無かったので、それがちょっとした筋交代わりになり、工事中小屋



シロアリの被害を受けた柱の断面

梁が無い状態でも、すぐに崩れはしないと判断しました。室内で天井をジャッキで支えて、小屋裏でも天井裏に1寸の板を置いてから、3寸角で母屋を支える形で補強しました。新しい梁に入れ替える時には、振動があるたびに周りを見渡して少しずつ慎重に作業を進めていきました。新しく梁と束柱がついた時は、ほっとしました。緊張していた後の達成感は何とも言えない快感です。その日の夜は、ぐっすり眠れたのは言うまでもありません。こういう事の積み重ねが、良い経験になると改めて思いました。シロアリ駆除の薬を専門業者に撒いてもらい、化粧材を取付け終わってから、塗装業者と左官業者の仕事です。いつも細かい注文にも文句を言わない、頼れる人達です。



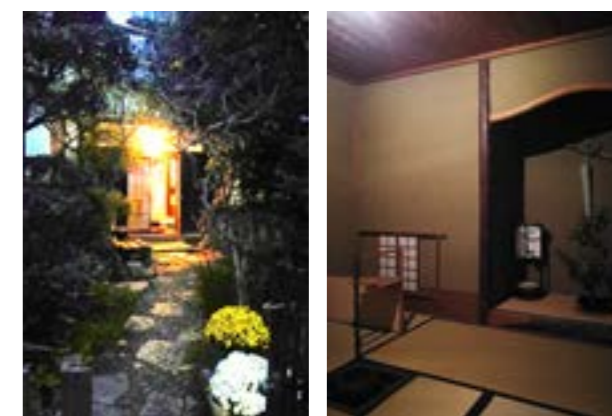
小屋裏の工事完了後

横浜市中区にある○邸を見学させていただきました。○邸は戦後に建てられた平家の、重厚な割には若い洋館付き住宅です。玄関を挟み洋館と二間続きの座敷、そして茶室と水屋が奥に続きます。洋館には台形の出窓ならぬ出床があり、3面に上げ下げ窓がついています。外部には鎧戸の開戸が両脇に、観音開きが正面に付いています。この鎧戸は室内からしか開閉できず、そのために上げ下げ窓の修理をされたといいました。この度の見学会はこの上げ下げ窓の修理が完成し、お披露目の会を兼ねて伺いました。上げ下げ窓はその両側に滑車や錘の上下する箱があり、可動の建具とバランスが取れると軽々と動き、どこでも止めることができます。開閉してみました。指1本で動きます！止まります！素晴らしいバランスです。



茶室外観

○邸は現在、普段の暮らしの場というよりは、お茶を楽しむ場としての座敷や茶室と、応接間やご近所の沙龙的な洋室といった地域に開放された使われ方をしています。日本間はマンションにもありますが、庭と一体につながる伝統的な座敷で、空間体験できる場はあまりありません。子どもたちにとっては新鮮な、高齢者にとっては懐かしい貴重な場です。人が訪れることで何より建物が喜んでいるのが分かります。居住まいを正して訪れて見ませんか。



左上：
アプローチ
と表玄関

右上：
茶室内観

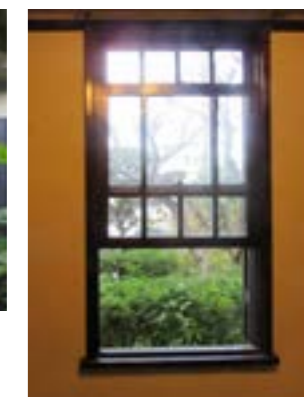
下：
座敷内観



我が家の上げ下げ窓のロープが切れたとき、外観からは修理の方法が全く想像できませんでした。山手の洋館に連絡を取り、洋館修理の職人さんにたどり着きました。固く塗られたペンキの下には65年前の職人さんの技が隠れていました。現代の職人さんが解体し、傷んだ部品を手作りして、窓は再び動くようになりました。窓の仕組み、職人さんの仕事などを見ることができてとても楽しく貴重な体験でした。今昔の職人さんに感謝です。



上げ下げ窓外観



上げ下げ窓内観



震災前外観

震災前



被災後



壁土と下地の竹小舞の保存



震災後に応急補強が行われた



津波で1階店舗正面下屋部分が流失、内部にも大量の瓦礫が流入した

保存解体



斜めに組まれた仕口部分「菱組」

トラスの解体



天井板解体

棟札



オリジナルの屋根材(緑色)



砂壁の掻き落とし保存



床板解体



出桁

正面看板部分の大ばらし

オリジナル外壁(亜鉛引鉄板)

解体完了(蔵のみ存置)



梁組



当初番付の墨書



部材の格納



梁の地組による形出し



梁組



蔵妻壁の保存補強(ピンディング)

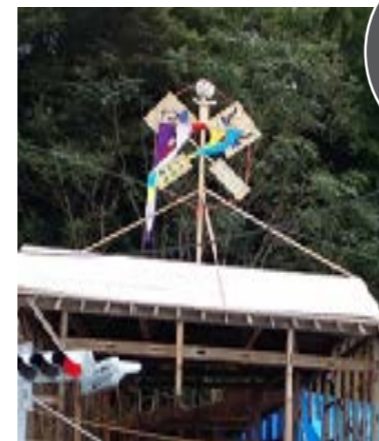


「金輪継」による柱材の継ぎ



柱材の根継(継手を千鳥に配置する)

復原工事



上棟式の矢羽



大ばらしした土壁を元の位置に設置



流失した下屋部分の復原(残存する部材に残る痕跡から形状を復原した)

蔵の屋根を補修(塩釜石)



一部残存した2階建具を修理・復原



大ばらしした正面看板部分を復原、銅板葺きを継ぎ補修



修理工事完了後の外観写真

2011年の3月11日に発生した東日本大震災から現在8年が経過しました。

宮城県気仙沼市では、津波で大きな被害を受けた文化財を国内外の支援によって保存修理復原する事業が続いています。この事業に設計者として関わらせていただいています。ここではその一つである「武山米店」の再生の記録をご紹介します。この建物は、昭和5年に建てられた古くから米店を営む武山家の店舗兼住居です。建物は津波で大きなダメージを受けていましたが、まちの復興のシンボルとすべく再生を試みています。全ての部材を丁寧に解体し、可能な限りの部材を修理して利用しました。また、壁などは部分的に大ばらしして再設置。津波で失われた部分は痕跡、古写真等から復原を行いました。現在は復興で大きく様相が変わったまちで古き記憶を残す希少な文化財建造物として、米店として営業を続けています。